

「パンの国は近づいた！」かにばんお姉さんコラボSS

『かにばんとかにばんお姉さんへ愛を込めて』

突然だが、俺はかにばんが大好きだ。三立製菓のかにばんが大好きなんだ。あのソフトな口当たりと素朴な甘さ、デフォルメされた蟹のかわいらしい形。そして何より、蟹の脚をもぐ楽しげ！ 他の食べ物には無い特徴を持つ、至高の逸品だと思っている。

ということで、だ。

「かにばん美味しいぞ教」の教典を作ることにした

揺れる馬車の中。何かと暇な時間。そう宣言してみたら、エビに気の抜けた顔をされた。

「ねえ、タスク様。さつき言つてたけれど、それって本当にある宗教なの？」  
「ああ、そうだぞ。今のところ信者は俺一人だが」

何といつてもついさつきできた宗教だからな。信者は総勢俺一名。皆の入信、待ってるぜ！

「まあ、この世界はこの世界でなんか宗教ありそうだしな。兼業ならぬ兼信を可能つてことにしてれば信者、増えるかな……」

「えっ、増やしたいの？ やだあ……」

うん。増やしたい増やしたい。俺達の身の安全の為にも増やしたいし、それ以前に俺は純粹な気持ちで、かにばんを宣教したいんだよ。だってかにばん好きだから！ だから『やだあ……』とか言わない！

「ではかにばん教典第一章一節」

「待つて、タスク様。それ長くなる？ 長くなるの？」

……あんまり長くならないようにして。そうだな。シンプルイズザベストという言葉がある。かにばんの味わいのように、シンプルでさつくりと軽やかで飽きの来ない教典にすべきだろう。そもそも兼信メインの宗教の数百ページに及ぶ教典とか重すぎるだろ。物理的にも心理的にも。よし。では改めて。

「最初にかにばんは天と地を創造された。……いや、天と地っていうよりは、かにばんの国を創造したことにしておいた方が軋轢が無くていいか」

よし。ということで決まり。教典の最初の一行は『最初にかにばんはかにばんの国を創造された』でいこう。これなら宗教戦争は起こらない。

「ちょ、ちょっと待って、タスク様。かにばんの国、って何？」

「かにばんお姉さんの故郷だ」

「か、かにぱんお姉さんって誰？　さつきから分かんない言葉がいっぱい出てくるよう……」

まあ、エピは知らないよな。なんてつたつてここは異世界。かにぱんお姉さんは勿論、かにぱんですら存在しない世界なんだからな。布教し甲斐があるつてもんだぜ。

「かにぱんお姉さんはなあ……かにぱんの国からかにぱん型の雲に乗つてお昼寝に出かけたら日本に来ちゃつた、十七歳の素敵なお姉さんだ。かにぱんの美味しさを伝えておられる」

ちなみにかにぱんお姉さん、若干クレイジーでらっしゃるところが大変によろしい。見ると元気と狂気が湧いてくる。なんかそういうお方なのだ。

「えーと、つまり、タスク様の世界で『かにぱん美味しいぞ教』を布教してる人なの？」

「布教じゃなくて広報だが。いやでも広報ってある意味布教か……？」

……そうだ。ある意味、広報とは布教。そう考えると『かにぱん美味しいぞ教』におけるかにぱんお姉さんって神の子ポジションに相当するお方なのではないだろうか。

……いや、神の子というよりは、かにの子。

「じやあ、タスク様はタスク様の世界でかにぱんお姉さんと一緒に『かにぱん美味しいぞ教』を布教してたんだね」

「いや、俺の世界のかにぱんの布教はかにぱんお姉さんお一人で十分だ」

かにぱんお姉さんがいらっしゃる以上、俺の出る幕は無い。俺以外も出る幕は無い。もうかにぱんお姉さんだけでいいと思う！

そうしてかにぱんお姉さんの何たるかを話していたところ、エピはふと、なんとなくもぞもぞしながら聞いてきた。

「あの……タスク様はその、かにぱんお姉さんっていう人が、好きなの？」

……なんということだ。これは難しい質問だな。

「好きか嫌いかと言われば好きだ。だが、かにぱんお姉さんとかにぱんどちらが好きかと言われたらかにぱんだ」

「あっ、そもそもそういう類の『好き』なのね……？」

「そりやそうだ。他に何があるっていうんだ。」

「かにぱんお姉さんは……同じ方向に向かっていく同志、或いは先駆者。そういうかんじだ。尊敬はするが信仰はしていない。すごいとは思うがなりたいとは思わない。そういうかんじなんだ」

若干失礼な感想になつてゐる氣もするが、實際そうなんだからしようがない。すげえとは思うが色々な意味で真似はできない。かにぱんお姉さんはそういう人なのだ。

「ついでに見ていて面白い」

「そういうかんじなの……？」

そういうかんじなの。そうなの。これが俺なりのかにぱんとかにぱんお姉さんへの愛の形なの。

「じゃあ……えーと、なんだ。『汝かにパンを愛せよ』『かにパンを求めよさすれば与えられん』『しょんぼりしちやう時にはチヨツキンチヨキチヨキと唱えよ』……」

さて、かにぱんお姉さんがかにの子であらせられるということはさておき、教典だ、教典。こういうのの形から入るってのは悪くないはずだ。多分。俺は心の赴くままにどんどん文言を書き留めていく。『かにパンの右脚をもがれたら左脚も差し出しなさい』『人はかにパンのみにて生きるにあらず。バランスの良い食事と適度な運動を!』『かにパン（かにパンを褒め称えよ、の意）』『かにパンを自分のように愛しなさい』……。

……何故か自分で正気が消えていく感覚がある。何故だ。おかしいな。「ちよつきんちよきちよきつていうのは何？ タスク様の世界の魔法？」

自らの狂氣と向き合いつつ唸っていたところ、エピが横から疑問を寄越してきた。いい質問だ。俺を一旦正気に戻してくれてありがとう。

「ああ。かにばんお姉さん直伝の魔法の言葉だ。よつて『かにばん美味しいぞ教』における聖句とも言える」

「せ、聖句……」

「そうだ。聖句だ。そしてこう唱えると俺達のハートのもやもやはかにばんお姉さんがチヨツキンしてくれる。或いは闇に葬り去ってくれる」「闇に葬り去ってくれるの!?」

そうだ。かにばんお姉さんは『チヨツキンチヨキチヨキ』でハートのもやもやをチヨツキンしてくれる。若しくは闇に葬り去ってくれるのだ。どうだ？ 中々に……中々にクレイジーだろ？

さて。そうしてまた教典の素案作りに戻った俺だが。

「つまり、タスク様つてこの世界に来なかつたら、かにぱーちゃんの布教、しなかつたんだね」

ふと、エピがそう言うので考えてしまう。

俺は元の世界でかにぱんを愛しつつ、かにぱんの布教活動などは特にしていたなかつた。というか、この世界に来て石をパンに変える能力などというものを手に入れてしまったからこそ、ここぞとばかりにかにぱんを出しまくつて布教しているというだけなのである。

そう考へると、ちよつと運命のいたずらってかんじがするな。

俺はこの世界に来なければ、かにばんの布教をしていなかつた。そしてこの世界も、かにばんを知らないままだつた……。

「そうだな……そう考へると異世界に来ちまつたのは悪いことじやなかつたかもしれないな」

俺は運命のいたずらに感謝しつつ、この世界に来てからのこと振り返る。

やつぱりここに来てよかつた。かにばんの布教し放題だし。まああんまり成 果は出でないが。

まあそれはそれとして、少なくとも、パン食い放題だし。いやまあ、若干食

傷気味だが。

でも人助けもできてるし。その分環境破壊もしている気がするが。

……。

まあ、色々考えちまうことはあるが、そういうのは全部チヨツキンチヨキチヨキだ。ハートのもやもやは全てチヨツキンして闇に葬り去るのだ。葬り去りたい。ジーザス。

「それで結局、教典つてどうするの？」

「宗教戦争を招かない為にも、『汝かにパンを愛せよ』にとどめておくことにするか……」

エピも見ている前でメモ用紙に『汝かにパンを愛せよ』と書いてみた。

……最早教典じゃねえ。俺はそつと、メモ用紙を破り捨てた。

「布教つて、難しいな……」

「そうだねえ、タスク様……」

布教って、難しい。俺に広報は向いてねえ。

そう思い知つた、辻下がりの馬車の中の出来事であつた。



お読みいただき、ありがとうございました！